

## 6. 紫斑病性腎炎

北里大学医学部小児科学教室 河西紀昭

### はじめに

前年度は腎不全に移行した症例を集めたが、今回は少し範囲を拡げて、ネフローゼ症候群を呈した症例を集め、予後について検討した。またこれとは別に、ネフローゼ症候群を呈さずに腎不全に移行した症例も報告された。

### 症 例

研究協力者10名(河西紀昭, 藤原芳人, 伊藤克己, 高田恒郎, 武田修明, 和田博義, 牧 淳, 吉川徳茂, 山下文雄, 重松秀一)により9施設から集められた67例(うち発症後3年以上の経過観察54例)を対象として検討した。表に各施設からの症例数を示す。またネフローゼ症候群を呈することなく腎不全に陥った5症例が報告された。

### 結 果

#### 1. ネフローゼ症候群を呈した症例について

1) 3年以上の経過観察を行い得た54例中腎不全移行例は14例(25.9%)であった。

2) 病初期3ヶ月以内に腎機能障害( $Ccr < 60 \text{ ml/m/1.73 m}^2\text{SA}$ )を呈した症例は7例であって、うち3例は回復し、4例が腎不全に陥った。

#### 2. ネフローゼ症候群を呈することなく腎不全に陥った症例について

1) ネフローゼ症候群を呈することなく腎不全に陥った5症例中1例が、病初期3ヶ月以内に腎機能障害( $Ccr < 60 \text{ ml/m/1.73 m}^2\text{SA}$ )を呈していた。この症例はネフローゼ症候群(一)とはいえ、尿中蛋白量 $\geq 1 \text{ g/day}$ であり、浮腫を認め、肉眼的血尿が持続した7歳男児である。26ヶ月の経過で透析に移行した。

表 ネフローゼ症候群を呈した症例

施設名	症例数：( ) 内は腎不全症例数
久留米大学	1 (1)
東京女子医	7 (4)
横浜市大	2 (0)
兵庫医大	1 (0)
県立吉田	2 (0)
倉敷中央	10 (0)
近畿大学	6 (0)
神戸大学	11 (2)
北里大学	27 (7)
計	67 (14)

2) 5例中尿中蛋白量 $\geq 1 \text{ g/day}$ の症例は4例、軽度の蛋白尿であったもの1例であった。

3) 肉眼的血尿が持続した症例は2例で、他の3例はこの点については不明であった。

### 考 察

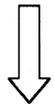
ネフローゼ症候群を呈した紫斑病性腎炎患児の約 $\frac{1}{4}$ が腎不全に移行する。またネフローゼ症候群を呈し、病初期3ヶ月以内に腎機能障害( $Ccr < 60 \text{ ml/m/1.73 m}^2\text{SA}$ )を示したものは更に要注意で、約 $\frac{1}{2}$ の症例が腎不全に陥る。

また、腎不全に陥るものは多くは3年以内に陥るが、ネフローゼ症候群を呈して腎不全となった14例中2例、並びにネフローゼ症候群を呈することなく腎不全となった5例中2例が、3年以上の経過で緩徐に腎不全に移行した。各々7年4ヶ月および10年の経過、4年5ヶ月および5年の経過

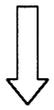
であった。これらの症例の組織所見は、硬化がゆっくり進行して荒廃する IgA Nephritis-like と考えられるので、この点について更に詳細な検討を要する。

また、治療については今年度は、パルス療法に

より悪化したと思われる1例、急性期に Ccr が 44.5 ml/m まで低下したが、ウロキナーゼ療法により軽快（但し現在いまだ発症から10ヶ月で経過観察中）した1例などが報告されたが、血漿交換療法を行った症例は報告されなかった。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

前年度は腎不全に移行した症例を集めたが、今回は少し範囲を拡げて、ネフローゼ症候群を呈した症例を集め、予後について検討した。またこれとは別に、ネフローゼ症候群を呈さずに腎不全に移行した症例も報告された。